

## 趣旨説明と概要

永吉, 守  
西九州大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2344807>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 43, pp.1-4, 2016-11-10. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

セッション A

世界遺産をめぐる文化ポリティクスー日本・九州の事例より

趣旨説明と概要

永吉 守(西九州大・長崎県立大・久留米高専等非常勤講師)

I 趣旨説明

本稿は、2015 年度九州人類学研究会オータムセミナーセッション A「世界遺産をめぐる文化ポリティクスー日本・九州の事例より」における趣旨、各報告を中心にセッションの概要を記録したものである。以下、本セッション企画者である永吉による趣旨説明をここに記す。

近年の日本では、UNESCO(国際連合教育科学文化機関、ユネスコ。以下「ユネスコ」と表記)の World Heritage: 世界遺産(世界文化遺産および世界自然遺産)、Intangible Cultural Heritage: 無形の文化遺産(世界無形文化遺産)、Memory Of the World: 世界の記憶(世界記憶遺産)など、俗に「ユネスコ三大遺産事業」といわれる遺産リストへの登録<sup>1</sup>可否が非常に注目されており、当該遺産が存在する地域では地域浮揚の一つとして期待されている。特に、本研究会の中心地域である九州においては、2011 年に福岡県田川市を中心として筑豊の炭鉱労働を描いた「山本作兵衛氏の炭坑の記録画および記録文書」が世界の記憶に登録され、2015 年には「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として九州・山口を中心とした日本の近代化を象徴する遺跡群が世界文化遺産に登録された。さらには、日本政府は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を 2016 年の世界文化遺産への登録に向け推薦書を提出した。

このような「(世界)遺産ブーム」とでも言えるような状況の中で、メディアを中心として観光およびそれに伴う地域浮揚の側面が喧伝される一方、遺産をめぐる様々な文化ポリティクスについては、一般的には「明治日本の産業革命遺産」についてユネスコの世界遺産委員会開催時の韓国政府・NGO の登録反対運動で顕在化したように、文化をめぐる国際政治問題とはみなされたとしても、それらのポリティクスがいかに生成されたのかというようなプロセスの問題としてはみなされていないように思える。また、文化人類学・社会学・民俗学ではまさにそうしたポリティクスやプロセスの議論が文化遺産論や観光論とともに活発になりつつある<sup>2</sup>。

そこで、本セッションでは、九州の事例を中心とした文化遺産について、様々な主体間の文化ポリティクスの現状を各発表者より報告して現状を把握し学問的な議論を深めるとともに、それらを学問の中で閉じたものにせずいかに一般へと開いていくかということ

<sup>1</sup> これらのユネスコによる遺産はリストに記載する形式であるので、正式には「リスト記載」とすべきであろうが、日本では一般に「(世界遺産等に)「登録」される」という文言がマスメディアを中心に使用されており、本稿では「登録」と表記する。

<sup>2</sup> アーリ 1995(1990): Lowenthal 1998(1997); 荻野(編) 2002; Smith 2006 などを代表例として、日本国内でも 2000 年代後半から 2010 年代に盛んに論じられるようになった。

目指した。

なお、本セッションは、セッション企画者である永吉による趣旨説明ののち、木村至聖(甲南女子大学人間科学部准教授、社会学)、永吉、川松あかり(東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻後期課程、文化人類学)、池田拓朗(長崎国際大学大学院人間社会学研究科博士後期課程、宗教社会学)の順で報告発表し、田中英資(福岡女学院大学文学部准教授、社会人類学)によるコメント、およびフロア参加者を交えての質疑応答という形式で約3時間のセッションとなった。

## II 各報告の概要

ここでは、各報告について、事前の要旨およびセッションの様相からどのような報告がなされたのかを紹介する。なお、本概要は事前に各発表者より提出された要旨をもとに、実際の発表内容を加味して永吉が編集したものである。

・木村至聖「文化の表象をめぐるスケールのポリティクス—軍艦島の「地元」高島を事例として—」

木村報告では、2015年7月にユネスコ世界遺産となった「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つである、端島炭坑(通称・軍艦島)を事例として、それが地域の資源として注目され、やがて世界遺産とされていく過程で、軍艦島の「地元」という主体がいかんにして形成され、それがやがていかんにして「明治日本」というナショナルな表象のなかに取り込まれていったのかについての報告がなされた。木村報告では、ローカルな地域社会での市民活動的なくみ(高島町有志および「軍艦島を世界遺産にする会」など)がグローバルな枠組を利用して国土観・歴史観の再編(スケールリング)を目指すも、地域社会(ローカル)がいきなりグローバルな価値を創出するには至らず、世界遺産が国家政府が関与せざるを得ないシステムであることも手伝って、結果的にはローカルな運動がナショナルな枠組の表象を強化することになったという現状を報告した。

なお、木村報告は、木村至聖 2015 「デザインされる国土と「文化」—「明治日本の産業革命遺産」をめぐる地域社会の葛藤」『地域社会学会会報』193 地域社会学会 pp.2-5

(<http://jarcs.sakura.ne.jp/main/newsletter/index.html>)をもとになされており、本セッション報告においては上記の概要報告および田中氏のコメントのみとし、論文掲載を割愛したので、上記学会誌ないし URL を参照されたい。

・永吉守「“明治日本の産業革命遺産” 構成資産の三池炭鉱遺産群に関する実践者・研究者として」

永吉自身が「NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」および「九州伝承遺産ネットワーク」の主要メンバーとして「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である三池炭鉱に関する遺産の保存と世界遺産登録に向けて活動してきた<sup>3</sup>。永吉報告では、その活動を振り返りながら、世界遺産登録過程と登録の前後における、地域内の価値の多様性、および政

---

<sup>3</sup> 永吉 2009 参照。

府ポリティクスの現状が報告された。

なお、永吉報告の内容は、セッション発表直後に永吉守 2016 「明治日本の産業革命遺世界記載までの備忘録—旧三池炭鉱における地域在住研究者の視点より」『九州産業考古学会報』24 九州産業考古学会 pp.2-5 (<http://kias.kilo.jp/kaiho/kias-24.pdf>)として掲載済みであるので、本セッション報告においては概要報告および田中氏コメントのみとし、論文掲載を割愛したので、上記学会誌ないし URL を参照されたい。

・川松あかり「筑豊地域における炭鉱の語り継ぎと二つのユネスコ遺産—記憶継承への期待と失望の中で—」（「世界文化遺産」、「世界の記憶」、そして「世間遺産」—旧産炭地筑豊、田川市にもたらされた「遺産」概念と地域住民の語り口—）に改題の上、本誌本号 pp.11-18)

川松報告では、ユネスコ世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産から世界遺産登録運動の過程で除外されたものの、これを機に、田川市がその多くを所有する山本作兵衛氏の炭坑記録画・記録文書等が見出され、日本初のユネスコ「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録されるに至った経緯と記憶の継承について発表がなされた。発表者は、この筑豊地域において、“炭鉱の過去が、誰によっていかに語り継がれているのか”を主題として調査を行っており、世界遺産登録運動と並行して田川市石炭・歴史博物館において開催された「炭坑（ヤマ）の語り部」講座における記憶・語りの遺産化について報告された。

それは、当初、遺跡というモノに付随する物語を収集することによって世界遺産登録を果たすという目標から、「世界の記憶」への登録へと目標が変化する中で、語り（≒記憶）そのものに価値を見だし、これを聞き取ろうとする場へと移行し、かつそれらは田川という場所を越え、広く炭鉱の「記憶」全般へと広がっていった。

そのような動きをバックアップし、時には主導してきた「専門家」たちは、「世間遺産」などのコンセプトによって記憶の多様性を認識し、その客観的な継承を目指しているように見える一方、地域住民は、世界遺産登録を軸に展開する田川での動きに対する不満や、自分の住む自治体の取り組みへの危機感、そして、地域の記憶を発見するコンセプトとしてのまち歩きに住民は無関心であろうという地域の現状認識をめぐる言説など、複雑でアンビバレントな地域の人々の語りが報告された。

・池田拓朗「長崎の教会群の世界遺産化をめぐる文化ポリティクスと物語—長崎市外海地方を事例として—」（本誌本号 pp.19-40）

長崎におけるキリスト教の歴史は「布教」、「弾圧・殉教」、「信仰堅持（潜伏）」、「復帰」の過程に要約することができ、それらの過程は具体的には、「バスチャン」「ド・ロ神父」「遠藤周作」という 3 つの視点とその物語に集約されている。そこに（結果的に本セッション後に 2016 年における登録の可能性は消滅したものの）新たに「世界遺産」という物語が付加されようとしていた。

本報告では、長崎のキリシタンたちにとって聖地と認識され、カトリックの歴史を表す代表的な場所である長崎市外海地方の出津(しづ)教会を事例として、行政が積極的に進めてきた世界文化遺産という物語も含めながら、地域の「教会守」の人々の「観光客へのガイド」、「ミサの見学」、「写真撮影禁止」といった側面についてのナラティブより、地域の物語が、

現在のカトリック信者の教会活動と観光および世界遺産登録との共存を図る方向性で模索され、調整が図られ始めているかをアーリの「観光のまなざし」論を援用しながらの分析を交えた 2015 年時点での現状が報告された。

### III むすびにかえて

本セッションでは、セッションメンバーとして文化遺産と観光に関する研究者である、田中英資よりコメントがなされ、さらに複数のフロア参加者の方から質疑を得た。

田中は、木村および各発表者が問題としていたユネスコ遺産(世界文化遺産、世界の記憶を含む)のグローバルな価値観とその登録可否に付随するナショナルな価値観、および現地で遺産や地域の文化歴史を保存継承する地域の価値観を「スケール」の問題としてくみとることについて、近年の世界的な研究動向からこうした研究群の深化に寄与する可能性を評価した。

また、田中英資より、本セッション報告の総括と論文化に際し、セッション時の発表者の発表内容の最要点やセッション全体の論点評価について言及したうえで、フロアでの質疑応答も含め、すべて「コメント」として総括をしていただいた。

したがって、本稿では上記のとおり、セッションの各発表者の概要を記述するにとどめ、総括については、本セッション報告特集内の田中英資「世界遺産をめぐる文化ポリティクス：日本・九州の事例より」コメントに譲りたい。

なお、本セッション報告・コメント各氏とフロアからご質問・叱咤激励・議論いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

#### 【参考文献】

アーリ、ジョン

1995(1990) 『観光のまなざしー現代社会におけるレジャーと旅行ー』加太宏邦訳、法政大学出版局。

荻野昌弘(編)

2002 『文化遺産の社会学ールーブル美術館から原爆ドームまでー』新曜社。

永吉守

2009 『近代化産業遺産の保存・活用実践とその考察ー大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブの事例よりー』西南学院大学博士論文。

Lowenthal, D.

1998(1997) *The Heritage Crusade and the spoils of history.*, Cambridge, Cambridge University Press.

Smith, Laurajane.

2006 *Uses of Heritage*, London and New York: Routledge.

(2016年8月9日原稿掲載承認)